

『後拾遺集』の新風をめぐる一考察 —— 僧侶歌人詠が担ったもの ——

実川 恵子

平安朝の和歌史を、歌人を軸にしてその歴史を辿る時、『拾遺集』から『後拾遺集』に至る長い勅撰集空白期に一つの変動を認めることができる。それは、藤原範永や源頼実といった受領層歌人達による和歌集団の和歌六人党の出現や、能因、道命、良暹や津守国基といった僧侶、神官歌人によって新たな和歌世界への様々な試みが見られたことである。

また、こうした時代に若く、歌歴もない藤原通俊がなぜ『後拾遺集』の撰者として起用されたのか。これらの問題は、近年様々な視点から論じられているように、撰者通俊による身内尊重の意識が、後拾遺集編纂に大きく働いたこと、またそれらの近親者達の協力によって編纂が進められたことが言及されている¹⁾。

その結果が、『後拾遺集』の歌風の特徴として掲げられる多くの女流歌人詠を評価し、入集せしめたこと、反面、最多入集歌人が和泉式部であったことは、単なる撰者の身内尊重の意識のみが働いた営為とは思えない。更に、注目すべきは、他勅撰集には見られない僧侶詠の多くを入集させたこと、そして撰者周辺やその縁に係わるような歌人達の多くを入集させていることである。しかもそれらの僧侶歌人達の多くは、『後拾遺集』のみに名をとどめるような一回

性の歌人であることも興味深い事実である。

このような『後拾遺集』固有な状況を生み出した撰者通俊の編纂意図や、歌風形成、更に『後拾遺集』の新風への問題にも、これらの現象は作用していると思われる。そこで、本稿では三代集に比して増加した僧侶歌人詠や、特に『後拾遺集』に一首のみを入集するような僧侶歌人に注目し、彼らの詠歌や入集が果たした役割について述べてみることにしたい。

一

まず、『後拾遺集』入集の僧侶歌人の状況について見てみよう。歌人数にして四七名、一六七首が採択されている。ここには、あえて作者名は記さず「詠み人知らず」として入集するが、諸本勸物から判名した二名(五五・一一四七)を含んでいる。

この四七名の僧侶歌人数は、全二十巻、全歌集二二一八首のおよそ十四パーセントにあたる。この現象は、三代集に比して増加の傾向を示している。また、神祇・釈教という新たな部立を設けるなど宗教的な深まりを見せる時代性の中で僧侶達は次第に詠作の場を広

げていったと思われる。

これらの僧侶達の中で多数の詠歌入集を果しているのが、能因(三二首)、道命(十六首)、良暹(十四首)、増基・惠慶(十二首)、素意(七首)、慶暹・慶範(四首)、源縁・深覚・長済・懐円(三首)、安法・源賢・源心・忠命・朝範・連敏・連仲(二首)である。これらの僧侶歌人は、ほとんどが前代に活躍した歌人達で、当代歌人は素意、永源、源縁、長済を掲げるにすぎない。

一方、『後拾遺集』には一首のみを入集する僧侶歌人が二二名おり、全体のおよそ半数に及んでいる。この二二名のうち、『後拾遺集』初出の歌人は八名、他の十四名の僧侶が『後拾遺集』のみ入集する一回性の一首歌人であることも注目される。この二二名の僧侶歌人詠を部立毎に整理すると次のようになる。

- 春上 55 (読人不知、賢勢)
- 春下 161 (法円)
- 夏 178 (元慶)
- 秋上 322 (実誓)
- 冬 407 (慶尋) ・ 418 (頼慶) ・ 419 (快覚) ・ 420 (長算)
- 別 473 (堪円) ・ 481 (良勢) ・ 498 (寂昭)
- 恋一 613 (実源) ・ 657 (永成)
- 恋三 733 (慶意) ・ 741 (遍救)
- 雑一 858 (聖梵)
- 雑三 1014 (円昭) ・ 1017 (懐寿)
- 雑五 1147 (読人不知、観心) ・ 1159 (教円)
- 雑六 1179 (光源) ・ 1188 (覚超)

◎は『後拾遺集』にのみ入集する歌人

この状況から、僧侶一首歌人は冬、雑部に多数認められる。また、歌人としてはそれほど評価されなくても、撰者の縁者や周辺の歌人詠を広く収集して入集させたということは、通俊の一つの撰集の方針として理解されるように思われる。

それでは、これらの僧侶詠はどのような資質を持つものであるか。詞書や詠歌内容に即してその具体相をとらえてみることにしたい。

二

四季歌中の僧侶歌は、七四首(春上十五、春下四、夏十六、秋上二一、秋下五、冬十三首)、このうち、能因十七、良暹九、惠慶・道命五首等が多くの入集を果たしている。秋上、夏巻に多数の採扱が認められる。

そこで、僧侶歌入集を多数認められる秋上を中心にその詠歌状況などについて考察してみることにした。

秋上巻は一〇〇首を収めるが、その凡そ二割の二二首を僧侶詠が占めていることになる。この二二首を詞書表記から概観すると、歌会、歌合等で詠じられた歌題詠が多く、なかでも題不知とするものが七首にのぼっている。このうち、左注が付され、読人不知詠とする、秋もあきこよひもこよひ月も月とところもところ見る君も君

という歌(二六五)がある。作者を読人不知とするが、左注から光源法師とし、主君頼通への敬仰と宿ほめの詠歌とする。この覚えやすく、耳ざわりが良く、主君への挨拶のような当歌は、序文にもい

う撰者通俊の庶幾する「をかし」の代表歌とも思える。これを、あえて題不知歌として入集させた意図は明確であろう。

また、駒迎を詠じた題詠歌が三首続き、このいずれも僧侶歌であるのも注目される。

八月、駒迎へをよめる

良暹法師

逢坂の杉の群立ちひくほどはをぶちに見ゆる望月の駒

(二七八)

源縁法師

みちのくの安達の駒はなづめどもけふ逢坂の関までは来ぬ

(二七九)

屏風絵に、駒迎へしたる所を説侍ける

恵慶法師

望月の駒ひく時は逢坂の木の下やみも見えずありける

(二八〇)

これらの「駒迎」歌群は、二七八歌の満月の光の中でまだら模様に見える駒の叙景性を描き出し、二七九では、駒の献上のため奥州安達が原から逢坂への道中が想像されるような詠風、三首目の恵慶歌は、屏風絵に描かれた駒迎えの様子を描いた屏風絵を見て詠じており、二七八歌と逆の発想をとっている。

この「駒迎」歌は、『拾遺集』秋・一七〇番、紀貫之歌の「逢坂の関の清水に影見えていまやひくらん望月の駒」の屏風歌が有名で、歌中の「望月の駒」から満月の光と影というイメージを重ね合わせることによって歌に奥行と情趣を持たせた歌境を作りあげていると思われる。この駒迎えという独特な想像性を創出した手法を、『後拾遺集』の僧侶歌人達が試みることになったと思われる。

また、七首の題不知歌と後拾遺集前後から増加する「心を詠める」という詞書を付した僧侶歌も目立っている。前述したような歌題化傾向の見られる中で、これら七首の題不知歌は、新奇な発想法(二五四・三一三)や詠歌の場から独立して鑑賞すべき詠歌(二九四)、新しい歌語の使用によってその歌風を「めずらし」とする慶暹の詠(三三三)など、また、秋上巻末に近い良暹歌も題不知とし、当巻のテーマを集約した秋の夕暮れの寂しさを抽象的に表現した世界を詞書が象徴する。

また、『後拾遺集』恋三、及び雑三に次のような稚児愛を詠った四首の僧侶歌が見られる。

頼めける童の久しう見え侍らざりければ詠み侍りける

律師慶意

頼めしをまつに日頃のすぎぬればたまのをよわみたえぬべきかな

(七三三)

思ひける童の三井寺にまかりて久しくおとし侍らざりければ詠み侍ける

僧都遍救

逢坂の関の清水や濁らん入りにし人の影の見えぬは

(七四一)

語らひ侍りける童の、こと人に思ひつきければ、久しうおとませで侍りけるに、さすがにおぼえければ詠みてつかはしける

前律師慶暹

よそひとになりはてぬと思ふらんうらむるからに忘れやはする

つらかりける童を恨むとて、おとし侍らざりければ、童のもとより、われさへ人を、といひにおこせて侍りければ詠める

律師朝範

恨みずはいかでか人にとはれましうきもうれしきものにぞありける
(雜三・九五三)

このように僧侶が寺童に送った恋歌は、『古今集』や『後撰集』の勅撰集には例がなく、『拾遺集』恋一に寛祐法師詠(六六二)の、

大嘗会の御禊に物見侍ける所に童の侍りけるを見て、

又の日遣はしける

あまた見し豊の禊の諸人の君しもものを思はするかな

の一例が見い出せるのみである。詠歌内容は、過去における恋情の始まりから現在に至る思いの辛さに主軸を置いた内容でもある。それに対して、『後拾遺集』の四首は、詞書の詠歌事情が詳細に語るように、いずれも「恋三」巻にふさわしい、恋の恨みへと進展した歌である。この詠法について、藤本一恵氏は「僧綱を帯する戒律きびしかるべき身で童児を愛した劣情の歌」とし、更に「特に律師慶意と、僧都遍救、前律師慶暹の三人は重い僧官にある身で、男色にふけり、稚児を愛しているのである。そういう実態はずっと以前からあったに違いないが、それを勅撰集の恋の部に堂々と撰入したのはこの『後拾遺集』が初めてである。」と述べておられる。また、川村晃生氏は、これら一連の歌を男色の詠とし、『袋草子』の真如院僧都公円と綿織八郎の逸話を掲げる。

しかし、このような詠歌を理解する時、作者が僧侶であるという

(七四三)

ことが、前面に押し出されてしまつて、ともすると前述のような理解に繋がってしまうかも知れない。視点を変えれば、僧侶と寺童との密接な関係という前提の中で、一般的な男女の恋愛歌と同時点の詠歌であるという自然な解釈もできる。あえて、後世での鑑賞をこれらの詠歌に持ち込むことは好ましいこととは思えない。

むしろ、これらの歌の詞書が詳細に詠歌事情を記述したり、歌の内容が、恋という私的な感情を終始とらえようとしたことが注目される。このことなどから考えて、僧侶達のこうした歌は、褻的な世界での私的な感情をあえて解放する一つの契機の歌となり得たのではないかと思う。僧侶歌人の詠作の方法や場が、こうした新風への試みとなつて、『後拾遺集』以降の『金葉集』、『詞花集』、『千載集』の同様な稚児への愛情の詠歌を入集させていることにつながつたものと思われる。

三

次に、雑歌中の僧侶歌について考えることにしたい。

八代集中、巻軸に六巻という雑歌を多数入集させ、その詠歌に詳細な詠歌事情を付し、歌の読まれた場と密着した詠風を持つものが多いのが『後拾遺集』の雑歌の特色として掲げられる。その中で僧侶歌は、四六首(雑一卷十首、雑二卷二首、雑三卷十首、雑四卷七首、雑五卷五首、雑六卷神祇四、釈教四、誹諧四)が入集する。

その中で多数入集する僧侶歌人は、増基、能因、道命等で他の巻とほぼ同様だが、聖梵、円昭、懐寿、兼経、教円、光源、覚超、観心(勸物から判名)といった一首歌人の多いのが注目される。

このような点に着目しながら雑部の僧侶歌を詳しくみてみよう。雑部最初の巻雑一は広義の月、水、無音、哀傷の歌七十首を配置し、その中の十首が僧侶歌である。巻頭から五首目に位置する良暹法師の次のような雑歌がある。

池上月をよめる

月かげのかたぶくまに池水を西へなると思ひけるかな

(八三六)

この歌の前歌、師賢の「船中月といふ心をよみ侍ける」と詞書する「みなれざをとらでぞくだす高瀬舟月のひかりのさすにまかせて」に続けて、この良暹の「池上月」という題詠歌を置いてある。良暹は和歌六人党や津守国基、賀茂成助等との交友も認められるので、本歌は彼らの歌会などで詠出された題詠歌であろう。歌の内容の「月が西に傾くにつれて、池の水も西へ流れていると思つた」という漸新な発想と趣向は誹諧歌的でもあり、「をかし」を感じさせる要素を投げかけるものでもある。

続く、八三九歌、懷円法師の歌は、非常に長文で物語的な詞書を有している。

月のいとおもしろく侍ける夜、来し方行末もありがたきことな
ど思つたまへて、かちより輔親が六条の家にまかれりけるに、夜
ふけにければ人もあらじと思つたまへけるに住みあらしたる家の
つまに出でて、前なる池に月のうつりて侍りけるをながめてな
ん侍りける、おなじ心にもなどいひてよみ侍りける

池水は天の川にやかよふらん空なる月のそこに見ゆるは

懷円は、雑三に「王昭君」の故事を赤染衛門や懷寿らと詠じてお

り、当歌の中国の伝承などに関心を持った歌人なのであろう。詳細な詞書と歌とが織り成す幻想的で独特な物語的世界を詠う。このような手法はめずらしく、雑歌ならではの魅力を投げかけてもいる。

八五八歌は、一首歌人の聖梵の詠歌、

山に住みわづらひて奈良にまかりて住み侍けるに、知りたる人もなく、また見し世のすみかにも似ざりければ、月のおもしろく侍りけるをながめてよめる

昔見し月のかげにも似たるかなわれとともにや山を出でけむ
聖梵は、伝不詳だが、『僧綱補任』に堅者として記録が見え、『発心集』にその説話が語られている人物でもある。初句「昔みし月の影にも似たるかな」には聖梵の孤独な心情が吐露されてをり、このあたりが雑歌採択の評価とされたのであろうか。

雑二巻は、恋愛に関する歌、六八首を収集する。ここでの僧侶歌は二首（九四〇・九五三）と雑部中極めて少ない。九四〇の素意歌は、「三輪の社わたりに侍りける人を尋ぬる人に代りて」と詞書した次の歌である。

ふるさとの三輪の山辺をたづぬれど杉間の月のかげだにもなし

三輪山の近くに住んでいた女性を探し求める男に代わって詠じた歌で、その居場所を尋ね当てられなかった恨みを歌つたもの、九五三歌は朝範の、前述した恋三に所収する稚児への恋愛歌（七三三、七四一、七四三）と同様の内容の歌である。この恋三巻の三首と雑二に配置したのはどのような分類意識によるものだろうか。恋部三首は共につれない童への恨みに終始するが、当歌「恨みずはいかでか人に問はれましようれしきものにぞありける」は、仲が途絶

えた童に再び便りをもたらした喜びを詠う。童への辛い恨みがあったらばこそ喜びを得ることができたのだ、という逆接的な詠風が恋歌的ではないところから、雑二の分類につながったものと思われる。

四

雑三は、官職、厭世、流謫、出家、隠棲といった最も雑歌的な無常感を中心に置く。ここには十首の僧侶歌を置くが、このうち明快(九九七)、円昭(一〇一四)、懐寿(一〇一七)という三人の一首僧侶歌人詠を載せる。特に懐寿歌は、赤染衛門、懐円らと「王昭君をよめる」という題の一連の歌として載せる。

雑五は、年中行事や対人関係、法会の歌を集めている。ここに入集する五首は、童児を弟子にするとの約束を反古にされたことを恨む源賢の歌(一一二六)、連敏の一一三二歌は、詞書の「頼国朝臣紀伊守にて侍りける時、いふべきことありてまかりて侍りけるを、ことさらにもの言はざりければよみ侍りける」とあり、会うことに応じない頼国への訴えの歌、更に一一四七の「杉も杉宿もむかしの宿ながらかはるは人の心なりけり」は読人不知詠とするが、太山寺本勘物により、観心とする。この歌は、詞書から、女の心変わりを嘆いたものであり、続く一一四八は連仲のかつて修行した叡山に戻った感慨を歌う。また、一一五七歌は慶範詠で、仏道を悟り得ないことを交友のあつた良暹に嘆いた歌である。僧侶としての私的な心情が吐露された歌が配置されている。

また、もう一首は、雑五の巻末に配された次の教円の雑歌である。教円は本集に一首のみを入集する歌人で、律師、大僧都を経て長久

五年天台座主となった僧侶である。

前伊勢守義孝子治前太政大臣のむまやに下りたりと聞てつかはける
いにしへの眉刀自女にもあらねども君はみまくさ取りて飼ふとか

(一一五九)

何らかの事情によつて、馬飼になった義孝に同情し、その安否を尋ねたものだが、「催馬楽」の詞章の「眉刀自女」を歌中に取り入れた点が一つの趣向ともなっているようである。また、やや諧謔味を帯びた本歌を巻末に置くことは、撰者通俊の雑歌への一つの新しい試みと考えてもよさそうでもある。

雑部最終巻の雑六は五九首を収め、神祇十九、釈教十九、誹諧歌二一首から成なっている。これら小見出しの部立を立てたことは、通俊とつて末法思想の浸透や当時の和歌史的な影響もあろうが、入集歌人の顔ぶれなどから、当巻への強い思い入れも感じさせる。

この雑六の僧侶歌の入集は、それぞれの部立に四首ずつが認められるが、ここでは、最終部の誹諧歌を取り上げてみたい。誹諧歌は既に「古今集」雑体に設けられたものの踏襲とされるが、歌数はそれよりも増加している。また、入集の歌人は赤染衛門・藤原道綱母・藤原実方・和泉式部・能因といった『後拾遺集』の代表的歌人が占める。ここにも撰者通俊の意図が込められているようである。

四首入集の僧侶歌は、

橘季通陸奥国に下りて、武隈の松を歌によみ侍けるに、二本の松を、人問はばみきと答へんなどよみて侍けるを聞きてよみ侍ける
僧正深覚

武隈の松はふた木をみきといふはよくよめるにはあらぬなるべし

紅葉の散りはてがたに風いたく吹き付ければよめる
(一一九九)

増基法師

落ちつもる庭をだにとて見る物をうたてあらしの掃きに掃くかな

(一二〇七)

題不知

雲井にていかであふぎとおもひしにてかくばかりもなりにけるか

(一二〇九)

人の、長門へいまなむ下るといひければよめる

能因法師

白波の立ちながらだに長門なる豊浦の里のとよられよかし

(一二一六)

これらいずれの歌も、歌語や表現、技法に誹諧性を認めたものであり、滑稽を主として和歌の正格から逸脱するような歌である。しかし、『後拾遺集』は俗語的な手法や藝的な世界に息づいているような古代的な残像をあえて救い上げ、形を変えて歌の活性化をめざしていったのだと思われる。歌の新しい一つの方向性を見出したものと思われる。

五

『後拾遺集』編纂に際して、撰者通俊は親類縁者やその周辺の歌人達の歌を積極的に採択して全二十巻を構成せしむることになった。そして、三代集の伝統を踏襲しながらも様々な革新的な試みを企てたと言える。特に、恋部を四巻に縮少し、その分、雑部に六巻を割

き、雑部最終巻に神祇・釈教・誹諧歌の小見出しを立てたことは、本集の大きな特色となっている。

また、入集した歌人構成にも三代集とは明らかに異った現象が見られることも掲げられる。それは、多くの女流歌人が入集することや、多数の僧侶詠を採るなど注目される場所である。撰者通俊の僧侶歌人評価がどのような意図によるものかは、明確ではないが、入集した詠歌を見る限り、僧侶という立場上、人間の様々な機微を見つめたり、和歌界の状況を客観視できる立場にあることから、歌の本質をもう一度とらえ直そうとする革新的な見方ができたのだと思われる。

発想や素材の新しさや藝的な世界を解放し、表現することで、歌本来の世界から逸脱した試みがなされたとも考えられよう。こうした僧侶歌評価の気風は、『後拾遺集』の新風に大きく作用したものである。

〔注〕

- (1) 武田早苗氏「『後拾遺集』編纂の一側面——撰者の身内尊重意識を軸に——」(『和歌文学研究』77号・平10・12)
- (2) 『後拾遺和歌集全釈』下巻(風間書房 平5)
- (3) 『後拾遺和歌集』(和泉書院 平3)

(和歌の本文は、『新編国歌大観』により、適宜仮名や漢字に改めた。)

